

# 【特集】 3. 11東日本大震災から一年

## 今 後 に む け て



宮城県生活協同組合連合会  
会長理事  
齋藤 昭子



みやぎ生活協同組合  
専務理事  
宮本 弘



東北大学生協同組合  
専務理事  
佐藤 和之



松島医療生活協同組合  
専務理事  
青井 克夫



みやぎ仙南農業協同組合  
常務理事  
鷲尾 衛

## <特集> 3.11 東日本大震災から一年 ～今後にむけて～

大震災から1年が経過しました。県内の会員生協は被災しながらも、被災者支援の活動や事業の再開などに取り組んできました。

この1年間の活動を振り返り、今後の活動に生かしていきたいと考え、2月9日（木）に会員生協の専務理事・常務理事の皆さんに集まっていたいただき、座談会を開催しました。

テーマは、「発災時の状況」「この間取り組んできた被災者への支援活動」「生協として今後進めていきたい活動」「行政へ要望したい事項」「これから大切にしていきたいこと」についてです。

率直なお話を4人の方々にお願いしました。

### —3月11日 発災時の状況について—



#### 齋藤会長理事（司会）

お忙しいところありがとうございます。最初に発災時の状況を伺います。

**宮本専務理事** 3月11日は、産直活動実務者全体会議が大崎市田尻町であって、そこに行っていました。生産者の皆さん、農協関係の皆さんと300人ぐらい集まっていました。2時46分に震災が起き、激しい揺れを長く感じました。そこからすぐ、生協本部までみんなで戻って来ました。戻って着いたのが午後8時半から9時ぐらいになっていました。



そのときには既に災害対策本部を立ち上げていました。生協本部事務所自体は、いわゆる立ち入り禁止っていうぐらいに天井が落ちていました。本部機能としてはもう使えないので、対策本部は生協本部に隣接する生協文化会館ウィズ及び商品検査室棟に設置し、行政とのやり取り、日本生協連とのやり取り、各部とのやり取りといったものを始めていきました。

共同購入事業所の被害はあまり大きくありませんでしたが、店舗のほうは津波の影響があって、石巻の地域とは連絡が取れない、かなりひどい状況になっているという報告でした。物流センターがある岩沼市のほうも、被害が大きく、店舗の営業っていう点では限られたところでやるしかない状況でした。停電とか断水という状況になっていましたから、営業についてはそれぞれのところでできる限り営業しようということで、その段階で、お店のところでは店長中心、もしくは店長がいないところは現場のメンバー中心でやっていたということです。震災当日に27店舗、2日目には44店舗で、店頭での販売になりましたが営業しました。電話はつながらなかったのも、実際に現地に行ってやり取りしながらでした。

**佐藤専務理事** 3月11日震災当日は新入生を迎え入れる時期で、翌日が後期入学試験で受験生も来ているなかでの震災でした。当日は、川内キャンパスは、新入生サポートセンターにたくさんの新入生や保護者を迎え入れて、新学期の新生活の準備をしている真っ最中でした。その中であってサポートしている学生スタッフが地震直後、新入生や保護者の方をきちんと避難の誘導をし、幸いにして、新入生サポートセンターでのけが人はなく、無事に何とか避難することができました。

当日、東北大学のそれ以外の各キャンパスでも、お店や食堂において商品等の破損はたくさ

んありましたけれども、幸いにして厚生会館の被害が直接あったところはありませんでしたので、人的被害ということでは職員も組合員も全くない状況でした。

**齋藤会長理事** 松島医療生協さんは大変でしたね。

**青井専務理事** そうですね、もう1年経ちますね。振り返ってみると、私も職員も心苦しい思いがあります。3月11日の2時46分という、内科が3時から診療が始まる前で、患者さんが数人待っていたということと、歯科は診療していたということと、あとデイケアをやっているの、デイケアに13人当日いましたね。離れた事業所に『なるせの郷』っていうところがあって、そちらでデイサービスをやっていました。

今までに感じたことのない、宮城県沖地震以上の揺れだったということと、2回にわたる揺れが来ましたので、「ああ、ただ事でないな、これは津波来るな」って瞬間的に思いました。ラジオで津波が来ているっていう情報が入ったこともあって、とにかく避難しようと近くの高台にあるホテルに駆け込みました。

私たちが一番心配だったのは、離れている東松島市にある『なるせの郷』と連絡が取れないことでした。全然連絡が取れなくて、次の日になってようやく、被災したことがわかりました。全壊したことがわかったので、現状確認に行きましたが、亡くなっている人もいました。泥にまみれていて、誰だかわからない状況で、自衛隊に話したら自衛隊というのは「生きている方が先だ」っていうことで、確かに生きている人が救われてくるのを見ていてすれ違うんです。野蒜小学校の校庭に行くと、遺体が転がっているんです、その辺に。そういうことがあって、最終的に職員3人と利用者さん12人が犠牲と



震災直後の『なるせの郷』

なられていました。

そういう意味では私たち自身が被災を受けましたが、医療生協は直接亡くなっている方を目の当たりにしたっていう部分では非常に辛いついていう部分と、しかし3日目からはもう全国から支援が入ったので、そういう意味では支えられてやってきたっていう部分もありました。

現在わかっているのは、組合員さん約6千人くらいなんですけど、東松島・石巻で亡くなっている方が、職員と組合員さん含めて、119人が亡くなっていることがわかっています。

**齋藤会長理事** 本当に辛い体験をされましたよね。高齢者施設のリスク対策は、今回の震災の中で課題として出てきている問題でもありますね。それでは仙南農協、鷲尾さんはどこにいらしたんですか。

**鷲尾専務理事** 農協の営農経済事業の主要メンバーは、私も含めて、先ほど話しのありました田尻に行っていました、みやぎ生協の産直実務者全体会議に参加していました。ですから農協の施設からは離れたところにおりました。

当日は2回にわたる大地震でした。当時、私自身も宮本専務も、農家の人たちと一緒にいるかっていう問題もあるので、「会議を中止してすぐ帰してください」ということにしました。

そして何とか四苦八苦しながら帰ろうとした

のですけれども、渋滞で、角田まで帰るのに、夜の 12 時を過ぎた人が大半でした。途中、電話連絡とか通じませんでしたので、農協がどうなったかっていうのは、当日はわからなかったです。

結果的には内陸部にありますので、海岸部にある農協ほどの被害はありませんでした。しかし米倉庫が壊れまして、査定の結果 2 億円ほどの被害額でした。南三陸・仙台・名取・亶理・石巻の農協と比べれば、被害額は少なかったです。

## —被災者への支援活動について—

**齋藤会長理事** 県民みんなが被災者ですので、皆さん自身が大変な体験をしたんではないかと思っています。各生協とも、すぐ被災者への支援活動や事業の再開に取り組みられました。まず被災者への支援活動を具体的に、特徴のあるところをご紹介いただければと思います。

**宮本専務理事** 大きく 3 つぐらいのことを行いました。1 つは行政と災害時応急物資供給協定を結んでいたという関係で、応急物資の確保とその搬送ということ、本部及び店舗商品部を中心に始めました。2 つめには、お店はとにかく営業を継続し続けることがライフラインとしての役割なので、一生懸命続けることをしました。共同購入は営業の判断が難しく、通常の営業ができない状況でしたので、営業をストップするという判断をして、緊急物資の配送を中心としながら動きました。3 つめは、事業再開に向けた作業に入っていました。お店と共同購入の事業再開の準備です。

水事業は、そのときは宅配の水がストップしてしまうので、山形に水を取りに行きまして宅配するということを始めました。学校部は学校のサポートに動き出しました。生活文化部では、メ

ンバーの方の安否確認に動いたり、福祉会のところでは入所している人、デイに来ている人を送り届けたり、安全の確保のために動き始めたというのが震災直後の状況です。

みやぎ生協が災害時に果たさなきゃいけない役割を、いかにそれぞれのところがしっかりと果たすようにするのが大事ですが、それぞれの部署が、緊急の状況の中で、震災、災害が起きたときの対応に動き出しました。

**佐藤専務理事** 震災直後、川内の体育館、工学部のあおば食堂、星陵の体育館、片平のさくらホールと 4 ヶ所に、近隣住民も含めて学生がどんどん避難をしてきて、その 4 つの場所が臨時の避難所になりました。大学のほうも大学が避難所になることは十分想定されていなかったと思うのですが、とにかく来て集まった避難者を迎え入れました。我々としてはすぐ炊き出しを始めました。ライフラインが寸断してしまって、電気・ガス・水道がまともに機能しない中で、とにかく用意できるものを全部用意しようということで、最優先にやったのは避難所への炊き出しで、おにぎりをつくったり、カレーライスをつくったりしました。

**齋藤会長理事** 3 月 11 日からですか？

**佐藤専務理事** ええ、3 月 11 日は工学部のあおば食堂で、残った機器と食材でできることをやりました。11 日の夜はプロパンで稼働できる熱源で、その日のうちに炊けるものは炊いて、おにぎりを出しました。大学から正式に要請があったのは 12 日からでした。12 日からは東北大学の災害対策本部と連携をして、臨時に急遽つくられた避難所に対して炊き出しをして、お腹空かせた学生たちにあったかい食事をとにかく提供するというを最優先でやりました。

もう 1 つは、キャンパスが危険でもあるので、

基本は、学生たちは自宅待機ということにはなっていたのですが、どんどんキャンパスに学生や先生方、事務の方が復旧へ向けた活動のために集まってきますので、そうした避難して来た学生や復旧活動をする職員に向けて、何か提供してくれということがあったので、真っ暗い中で、電気も消えている中でしたけど、ほぼすべてのキャンパスの売店で臨時営業をしました。

電気もなくて、レジも照明もない中でしたけど、手計算で、お店にあるカップラーメンとか、とにかく提供できるものはすべて提供しました。11日のその日のうちから、真っ暗い停電の中で出せるものは、各キャンパスで、それぞれの店長の判断でやり始めていました。それぞれのキャンパス、7キャンパスで店長が目の前の学生や先生方との関係で炊き出しをし、臨時営業をしてということで、できることをどんどんやっていきました。

**齋藤会長理事** 少し落ち着いてきたあとの支援としては、修学継続支援、これが大きいですよ。これは大学生協連として全国的になったものと、今取り組んでいることがありますね。そのあたりを付け加えていただけますか。

**佐藤専務理事** 全国大学生協連を中心として、全国の大学生協では最優先で被災した学生の学業継続支援のためのお見舞い活動を始めていました。被災した学生が学業を継続できるようにということで、全国から募金を募って、その集められた募金で被災した学生にお見舞い活動を始めていました。

お見舞い活動としては大きく3つありまして、1つが父母見舞金、今回震災によって扶養者を亡くされた学生に対して3万円のお見舞い金をお渡ししています。それから全壊見舞金ということで、自宅もしくは実家が全壊した学生さんに対して、これもまた3万円のお見舞い金を出

しています。それから夏以降始めたのが原子力災害見舞金で、実家が福島警戒区域や避難区域にある学生に対して1万円のお見舞い金を出しています。全国大学生協連としては父母見舞金、全壊見舞金、原子力災害見舞金ということで、この3つのお見舞い金を、募金活動を進めながら取り組んでいました。

東北大生協としては、全国の動きとつながりながらも、独自に東北大学の被災学生への支援をとということで、今回の震災により扶養者を亡くされた6人の東北大学生が学業を継続できるように経済的支援を行うことを総代会で決めました。具体的には、東北大生協独自に「学業継続支援基金」を創設して、6人の学生に食事の支援ということで、ミールカードという食堂の年間定期券を無償でお配りする取り組みを始めました。



学内での募金活動

**齋藤会長理事** 青井さん、いかがですか。医療福祉生協連は、全国からの支援を継続的に行いましたよね。

**青井専務理事** そうですね。医療機関は自分たちが被災者であっても人を助けるというのが宿命というか、それが元々の事業なので、命と健康を守ることを震災の当日から活動しました。とにかく避難所に入ったときにはもう既に具合の悪い人に、ドクターが相談に乗るとか、看護師が血圧を計るところから始まりました。

とにかくもうその日、その夜から、私たち含め、泊り込みでした。避難所で、ずっとそういう活動を行いました。

だから別に指定されているわけではないけれど、具合の悪い方が来たらここでやっています。それからデイケアにいた方々も具合の悪い人や不穏の人も多いもんですから、その夜からもう我々は、看護、介護しながら、という感じでした。

訪問看護師は当日から動き、医療依存度が高い利用者宅を探しながら家庭訪問をして状況を掴みました。在宅酸素の方なんかは、一番難しい。電気が止まっちゃうと呼吸困難になって命を落とす恐れもありましたので、私ふくめ 11 日の夜、決死隊ということで、近所の組合員さんと水に濡れながら診療所まで行って酸素ボンベを持って来て配ったりしました。

そういう感じで 1 日、2 日目からも相談活動、それから 14 日の朝には診療所を開きました。診療所は、浸水で 30~40 センチやられていて、医療器具も全部だめになったので、2 階のほうで臨時的診療所を開きました。しばらくの間は、午前中診療、午後は先生と看護師が避難所訪問で、松島町、東松島市の避難所をずっと回りました。

どこを回るかっていうのは、私などが松島町役場に行ったり、東松島市役所のところに行つて、どこが困っているかを聞き、ここここをうちが回りますからという感じでした。とにかく医療人としてやれるべきことを最大限やりながら、過ごしました。15 日くらいからは全国のお医者さんが次々来て、ペアで動くという感じになっていって、どんどん広がっていきました。

神戸のいろんな話を聞くと、やっぱり今回はその DMAT（災害派遣医療チーム）JMAT（日本医師会災害医療チーム）などの緊急部隊が非常に体制が整ってきた感じがします。数日経つと、どこが日赤が担当で、ここは自衛隊が担当、

じゃここを松島さんが担当してくださいというふうに分けられて、非常にスムーズになってきました。震災の経験が、やっぱり生きていたのかなと思います。医師も看護師も必死で頑張っていたかなって思います。そこに全国の応援が来て、励まされて動いたっていうのが一番のところでしたね。

**齋藤会長理事** それから、被災者の多い石巻では、たくさんの仮設住宅が、みやぎ生協の蛇田店や大橋店のすぐ近くに 있습니다。その人たちが毎週木曜日のオープンカフェに誘われてきて健康相談もしています。地域生協と医療生協が一緒になって支援するという活動も、すっかり定着して続いているようですね。

そして仙南地区のほうでは、県南医療生協と白石店が協力しているようです。

**青井専務理事** そうですね、県南医療生協では、山元町、亘理町のほうに関西の医療生協と一緒に、ずっと入っていますね。

**齋藤会長理事** 仙南農協さんはいかがでしょう。震災後には、生協本部にもおにぎりを届けていただいて本当に感激でした。ありがとうございました。

**鷲尾常務理事** 農協らしさの特徴で、幅広くいろんな取り組みをやりました。おにぎりの炊



き出しはもちろんですが、あとは新鮮ないちごを届けました。こんな時にいちごが食べられるのかという反響でした。いろんな対応を幅広くしました。

業務的には3月11日は何もできない状況になりました。ただ次の日から、金融関係の事業は、組合員の方が困るということから、電気が通じないなかでATMは使えませんでしたので、現金を手払いしました。ハンコが見当たらないとかのいろんな問題がありましたが、運転免許証か保険証等の代わりになるもので50万円以内だったら支出しますという整理をいち早く決めて、資金で困ることのないように対応しました。

営農経済事業のほうは、米の炊き出しをしました。私は翌日には生協にお見舞いに伺い、あと何が今できることなのか、農協から野菜とかいちごとか出した場合に受け入れることのできる店舗はどこかと、翌々日からそういう打ち合わせをしました。

それから、運送する車の軽油やガソリンが課題になりました。大部分のトラックは軽油ですから、その部分はどうするんだってという問題です。生協からも、もし農協で軽油がないために運べないっていうんだったら、車出しますよってというようなこともあって、そういうやりくりをしながら対応をしてきました。

亘理町と山元町から、内陸部の角田とか柴田とかの公共施設に、被災者の方が移動してきていますから、その人たちに対して、精米の提供をしました。実は電気も何もないなかで、農協や大きな農家では、発電機持っていましたので、そういうものをみな集めて、精米機も調達して、発電機で起こした電気ですべてを、毎日のように米、精米について対応しました。

あともう1つは、ガソリンスタンドの行列が大変でした。次の日からみな並ぶもんですから、これを整理していきました。農協の組合員から

は、「何で一般の人と一緒に並ばせて、ガソリン供給するのか、組合員だけに渡せ」という声もありました。まして県外から来た福島の人たちに、なんでガソリンを分けてやる必要があるんだという。自分たち優先だという主張も一部ありました。そのような区別をすべきじゃないということ説得しました。現場では喧喧諤々けんけんがくがくで、大分苦労しましたね。しかしこういう時だからこそ、困っている人のための事業ということで行いました。

## —生協として今後すすめていきたい活動 ・ 行政への要望について—

**齋藤会長理事** 燃料不足は本当に深刻でしたものね。本当にありがとうございました。

次のテーマに移りまして、生協として今後強化したいこと、重点にしていることについて、特徴的などころをお話いただけますでしょうか。その中で行政に要望したいということが入ってくるかと思しますので、行政へ要望したい事項も含めて、お話をいただきたいと思います。

**宮本専務理事** 被災者の心のケアということで、ふれあい喫茶やお茶会の取り組みを、ボランティアセンターを4地区につくって現在もすすめています。メンバーの人たちが自分たちでケアする活動を進めていってもらうという活動を、各地域ごとにしています。いかに被災者の孤立化をなくし、孤独死をなくすのかという神戸のときの教訓をしっかりと生かしてやっぴこうと考えています。これはとにかくずっと続けていかなければいけないと思いますし、それをしっかりとやっていきたいというのが一番大きな取り組みでしょうか。

あとは事業的には地域産業の復興の取り組みだったり、それからお買い物困難になっている人への生協便やふれあい便のお買物支援の取

り組み、それから仮設住宅での被災者支援の取り組みや離島での取り組み、配達お弁当の取り組み、そういったことを継続的に続けていきたいと考えています。

**齋藤会長理事** 地域産業の復興の取り組みということで、「食のみやぎ復興ネットワーク」の活動を7月から始められたということですが、宮本さん、今の状況や活動で主なものをご紹介しますでしょうか。

**宮本専務理事** 今、170社ぐらいの加入のネットワークになっていて、いろんな食品加工のメーカーさん、NB（ナショナルブランド）のメーカーさん、卸さんに広がってきています。できる限り復興の支援になるような食品の開発ということを中心として、この間は、仙台白菜の栽培・普及だったり、それからお酒や漬け物の商品開発だったり、いろんなプロジェクトを現在おこなっています。

できるだけ地元の復興に役立つようなものを、いろんなメーカーさんの協力で新しい商品としてつくったり、それから全国的に継続できるようなそういうようなものにしていこうと、生産者の皆さんとも協力しながら進めています。

**佐藤専務理事** まもなく1年を迎えますが、そういう意味で言うと、また新しい新入生を迎え入れることになります。理事会で特に先生方から言われているのは、今度来る新入生は、東北から来ている学生でなければ、この震災を経験していないので、生協としては、この震災をきちんと語り継いで、防災意識を持った学生を育てていくということ、ちゃんとやらないといけないと考えています。

それからもう1つは、幸いにして最終的な志願者数は去年とそんなに減ってはいないようですが、東北大学も受験者にいろんな影響が出て

きている中で、大学と一緒に復興をしていかなきゃいけないと考えています。

随分前から相談はしていましたが、なかなか実現しないうちに今回震災を迎えることになりましたけれども、改めて「災害時協定」を大学と大学生協とで締結をすることを準備していきます。「災害時協定」のある・なしに関わらず、炊き出しをしたり、物資の供給、提供ってというのはどんどんやりましたけども、改めて次の激甚災害に備えて、大学と連携していくことをもっと強めていきたいと思っています。

3つ目に、現実にはなかなか今できていないのですが、学生ボランティアをきちんと組織して、長期にわたる復旧・復興へ向けて、東北大の学生を復興の力にしていくことをやっていきたいと思っています。

大学はボランティア支援室を立ち上げていますので、一緒になって、継続的に長期にわたる学生ボランティアの派遣というのをやっていきたいと思っています。大学生協がやっているボランティア活動がいいなと思っているのは、本当に被災地の力になるために、様々な活動をしています。それを派遣していくときに、学生のフォローをいろいろやっていることです。ボランティアが持っている意味や被災地が今どんな状況になっているかを事前に学習し、1日ボランティア活動が終わったあとその振り返りをみんなでしているんですね。こういった活動が非常に学生自身の成長にもつながっています。

**齋藤会長理事** そうですね、生協の役割を考えるうえで、今年は国際協同組合年もスタートしております。ボランティア活動は、コーディネートをする人がいないとできないので、もし提携できるのであれば、地域生協の組合員はそういうことをとって勉強していますので、今後協力できたらいいのではないかと思います。



みやぎ生協  
宮本 弘 専務理事



東北大学生協  
佐藤 和之 専務理事



松島医療生協  
青井 克夫 専務理事



みやぎ仙南農協  
鷺尾 衛 常務理事

**青井専務理事** 去年、鳴瀬のデイサービス施設がなくなったので、それを再建しようというのが1つ大きな課題です。本来であれば今年の3月か4月にできる予定でしたが、土地の交換交渉が遅れていて、その場での建設は取りやめ、別の場所に今検討しています。組合員さんとの関係や利用者さんとの関係でも、早急につくりたいと考えています。そこを今理事会含めて全力を挙げているというのが大きな部分です。

事業活動では、内科と歯科は通常に戻ったのですが、もう1つは東松島市野蒜は、松島町に次ぐ拠点の組合活動の地域だったので、そこが大きな被災を受けていますので、その支援に我々も入ろうということで入っています。

仮設住宅については、東松島のボランティアセンターと話しをして、鳴瀬川から南側の地域の仮設住宅関係の健康相談を行っていて、情報を保健師さんに提供したりしています。我々のスタッフは、お医者さん1人と看護師さんが数人なので、エリアを分けながらやっています。

一度仮設住宅に入った方々も、結構自宅に戻ってきているんですね。1階は津波でやられたけど、直しながら2階に住んでいるっていう方もいらして、その方への援助も考えています。現在住んでいる方々の悩みだとか要求だとか聞きながら、少しでもお役に立てれば、ということで、先週は組合員・職員21人が7組に分かれて支援に入りました。

できれば東松島に、我々としてたまり場をつくっていきたいと考えています。専従者も1人配置して、これについては財政的には医療福祉生協連が2年間支援してくれるということだったので、そういう活動を地域での医療生協だけの組合員さんだけでなく、地域に少しでも役に立てるような生活相談や、そういうことも含めた場所を今つくろうということで、準備しています。去年の夏くらいまではなかなか自分たちがどこかに行くことができずにいましたが、ようやく秋口くらいから自分たちが被災地に行つて何とかしようっていう雰囲気になってきています。組合員さんも含めてですね。だからうちの組合員さん、今、非常に元気です。びっくりするくらい頑張っています。

**齋藤会長理事** 何とか、土地がまとまって、建設がスタートするといいですね。ありがとうございました。

**鷺尾常務理事** 今から兼ね合いがあるのは、圃場が塩害でやられて回復しない圃場があるんですね。石巻も仙台も亘理もです。米の作付けが不可能な圃場について、去年はその分を内陸部の被害に遭わなかった農協で作付けをし、その中から15,000円とか20,000円を、つくったところから補償という形で、お金を支援金として送る仕組みを農協の中でつくったんですね。

だけど休耕田をいつまでできるのかということで、農家もなかなか簡単には再度圃場にはしにくいんですね。それで、被害面積を挽回するほどお手伝いはできなかったんです。けれども、今、米が自給均衡の格好になっています。だから今年も作付けを少しふやすことでお手伝いしようと考えています。

ところで今一番何よりの問題は、放射能のセシウム問題です。私らは去年の津波にも遭わなかったし、地震の被害は共済等で補てんして修復も何とかされています。残る問題は、生産物の放射能問題、この1点ですね。これについて最初は宮城までは大丈夫だろうということで、漠然とした期待がありました。当初かなり神経質にいろいろ測りました。野菜ではオーバーするようなものはなかったですね。最初ヨウ素があったのですが、2～3週間経ったらほとんどなくなりました。野菜のほうは検知なしになったんですね。実は安心していたんです。

そうしたら夏場になって、牧草ですね。7月の牧草にセシウムが出たんです。それから何だっということになって、それまでに牧草を食べさせていた部分がどうなったんだということと、続いて今度は稲わらですね。私らも農協にしながら、ここまで宮城の稲わらが全国に流通していると思っていなかったんです。稲わらは農協系の流通じゃなくて、稲わらを出荷する特別な業者があるんです。これが大きな問題になりましたですね。稲わらにセシウムがあるということになって、その稲わらを食べた牛に、肉に蓄積しているんじゃないかということです。これは福島をはじめ、汚染牛が一時出荷停止になった経過があります。

野菜は全然問題ないのですが、シイタケにおいては、白石と角田、丸森は出荷規制をして、生シイタケも乾燥シイタケも出荷は制限になっています。これも近隣の、丸森とか白石とか、角田市周辺の山林では、ほだ木になるよう

な分を切っちゃいけません。ほだ木にセシウムがついているわけです。

みんな暗中模索です。

行政に対しては、要望があります。1つ1つの方針が非常に遅いということと、先ほどから言っている、稲わら、汚染された稲わらですね。あと汚染されたたい肥、原発の爆発で外にあったものは使えないわけですよ。土壌にすき込んだら、土壌が今度汚染されます。要するに福島で水素爆発をして、その時期に生えていた牧草は、これはもうだめなんですよ。そして1回刈り取りして、それを今農家でみな保管しているわけですよ。置く場所もないわけです。問題はいつまで農家に保管させるのか。県なりがどうしてそういう指示ができないんだと。最終処分場、処理場、一時貯留場所ってというのがどこも定まっていないんですね。

市町村行政と農協だけに任せるようなことでは困るところが、今一番県行政に要望したいことです。

## —これから大切にしていきたいこと—

**齋藤会長理事** 被災した地域の再生をどうするか、大変多くの提案が国や県にされていますが、その地域に住んでいた人たちの生活再建やなりわい再建をまずやらないと、その地域は本当に元気になりません。

最後に、これから大切にしていきたいことを一言ずつお願いします。

**宮本専務理事** みやぎ生協は県内世帯の7割がメンバーになっていることからすると、この宮城県自体及び宮城県で被災した皆さんが本当に元の暮らし、元の仕事、それから元の地域のつながりに戻っていくために、みやぎ生協ができること、みやぎ生協を通して全国の力を借りながらできることをやりきっていくことが、す

べてだと思えます。

その中では、食産業の復興のこともあるだろうし、心のケアの問題もあるだろうし、それからお買い物支援的なこともあるだろうと思えます。みやぎ生協の場合は、そのことを含めて、とにかく地域の復興、元の暮らしにいかに戻るのか、元の暮らし以上になればいいんだけど、それがやっぱり一番だっというか、そこがとにかくみやぎ生協としてやっていかなければいけないことだと思えますし、終わりのない活動だと考えています。

店舗にしろ、共同購入にしろ、共済にしろ、学校部にしろ、どの部署にしろ、それぞれがそういうところを基にしながら、自分たちが自分たちの分野でできることをしていこうとしています。それがトータルに合わさって、結局みやぎ生協全体の役割になっていくと思うので、みやぎ生協全体として大切にしていけることは、どこどこっていうことじゃなくて、地域っていうか、組合員の暮らし自体が元に戻っていくことや、そのことに役立つことを大切にしていけるということになると思えます。

**佐藤専務理事** 今年が国際協同組合年でもありますので、やっぱりこの辛い体験を語り継ぎながら、学生同士の助け合いの活動をより強めていくきっかけにできればと思っています。募金を通して被災した仲間を救おうというのは、非常に生協らしい取り組みで、それに共感して参加してくれている学生が増えてきていますので、こういった取り組みを一過性のものにならないで継続的に取り組んでいく。そして、こういった活動を通して、協同組合のよさを感じて、また生協の活動に参加し、これからの社会をつくっていく学生を育てていく。これからの社会を築いていく学生を育てる役割が大学生協の中にはあると思っていますので、ここを今後の取り組みの中で強めていきたいと思えます。

**青井専務理事** 私のほうは、先ほど齋藤さんから出たように、地域生協のみやぎ生協と協同の関係がうまくできてきている部分がありますので、地域で一緒に運動をすすめていきたいと考えています。地域の人たちのいろんな要望を入れながら、手を差し伸べるような活動を共にできればいいと思えます。そんな取り組みが今始まったのかなと思うので、できればそういうのを少しでも広げていければと思っています。

**鷲尾常務理事** 農協では、改めて協同組合という組織でよかったねっていう点で再確認できたことですね。生協との取り引きが、産直という形でできているっていうことが、組合員の末端までにお互い見える形で説明ができています。ところがそれ以外の一般量販店とか市場流通になりますと、風評に支配されているのです。根拠ない風評にね。

そういった意味では生協さんときちっと、どういう取り組みでどうだったということ、このセシウム問題でも話し合いながらしているので、こういった部分は強みになったと改めて思えます。原発の補償問題も、個人で請求を出そうとしたら、用紙に書ききれません。それが農協がまとめてくれて助けてもらったということで、改めて農協の役割が認識されたと思えます。

#### **齋藤会長理事**

本日は、ありがとうございました。